ブック

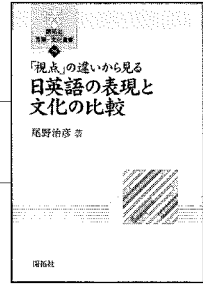
学習指導要領の外国語教育の目標は「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ…」と掲げられており、物事を捉える視点や考え方が重要である。

本書は日英比較を、「絵本」「映画ポスター」「文学作品」等を通して行ったものである。とりわけ、全体の6割を占める絵本の内容は筆者の授業で扱ったもので、「紙芝居的手法」で表現されている。彼は、日本語は「体験的把握」であり、英語は「分析的把握」であると定義づけ、日本語表現には「知覚体験的」な特徴が根底にあるとしている。

例えば、"When the Little House saw the green grass and heard the birds singing, she didn't feel sad any more." (V. L. Burton, The Little House:p. 37)の英語に対して、日本語は「みどりのくさが　みえてきました。とりのうたもきこえます。ちいさいおうちは、もうすこしもさびしくありませんでした。」そして、知覚の中でも人を視覚対象として把握する場合、日本語では「顔」を重視し視覚体験的に使用しているのに対し、英語はその表現の語彙（face）がない。「ねずみの　おいしゃさまは、まだ　ゆめのつづきをみているような　かおで、あなの　そとへ、でてきました。」（中川正文『ねずみのおいしゃさま』：P. 18）"Still half asleep, Doctor Mouse went outdoors.(Dr. Mouse's Mission:P. 18)

多様な例を引用し、筆者は、日本語文化は「見え」の体験にこだわる視覚型の文化であり、英語文化は「見えより実質的な中身にこだわる文化」であると結論付け、絵本のレイアウト、映画のポスター、料理の食器や盛り付け、包装、服装等、日本の視覚型文化の特性を挙げている。さらに、日本の集団文化、自然と一体となる文化等についても具体的に述べており、外国語学習者にとって、語彙や表現の背景にある文化を認識し、言語文化を学ぶ大切さが理解できる。

（愛知教育大学教授・高橋美由紀）



「視点」の違いから見る 日英語の表現と文化の比較

尾野治彦　著

開拓社　2160円

☎03-5842-8900